

群 教 セ	E03 - 01
	平21.241集

小規模の中学校における新しい人間関係を 築く力を育成するための研究

— 異世代交流学习に視点を当てて —

長期研修員 佐藤 和昭

《研究の概要》

本研究は、全国の小規模の中学校に対して実態調査を行い、結果を基にして新しい人間関係を築く力を育成するための方策を示すことを目指したものである。具体的には小規模校のよさと課題を踏まえ、交流活動について分析・考察し、充実した異世代交流学习を実施するためのプログラム（3年間の系統性をもった年間計画、事前から事後までの一連の流れを重視した指導計画、交流学习を通して生徒が変容する姿の見取り方）を提示した。

キーワード 【小規模校 中学校 新しい人間関係 異世代交流学习 プログラム】

I 調査研究の背景と目的

1 現状と課題

平成20年1月に出された中央教育審議会の「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」では、豊かな心を育成するためには、親や教師以外の地域の大人や異年齢の子どもたちとの交流が極めて重要であると提言されている。また、平成20年3月に告示された中学校学習指導要領においても、中学校間や小学校、高等学校、特別支援学校及び高齢者などとの交流の機会を設けることの重要性が述べられており、交流学习の充実が求められている。

群馬県では、平成21年群馬県教育振興基本計画の中で基本施策の一つに「社会の変化に対応し、社会に貢献する人材を育てる」とあり、その施策の取組として「社会を学ぶ体験活動・ボランティア活動」を挙げている。このことは近年、家庭においては核家族化や少子化が進み、地域社会においても連帯感・人間関係の希薄化が見られ、子どもたちの成長に欠かせない人と人が直接触れ合う体験が乏しくなっている現状を背景としている。

また平成21年学校教育の指針において、よりよい人間関係を築く力の育成には、互いの認め合いを高める学級づくりが必要とされ、学年・学級経営の充実が必要不可欠であると示している。

学級経営とは、学校経営の基本方針の下に、学級を単位として展開される様々な教育指導の効果を上げるために必要な諸条件の整備を行い、運営することである。子どもたちの学校での生活は、所属する学級を中心として展開されているので、

どのような楽しい思い出をつくれるか、友達とどのような活動をするか、どのような生活を送るかなど、学級における学習や生活にかかわる経験の内容が、一人一人の子どもその後の成長に様々な影響を与えることからその重要性は明らかである。

協力校は、各学年単学級で、年々生徒数が減少している小規模校である。幼稚園・小学校ともに多少の人数の変動はあるが常に単学級で、生徒同士の気心も知れており、学級を仲間意識のある集団としてとらえている生徒が多い。その反面、集団活動に制約が生じるために、様々な人と触れ合う機会が不足してしまい、人間関係が固定化されてしまう。そのことが原因となって、何事にも受け身にならずに自ら考えて積極的に物事に取り組み、人とかがわっていくことができる力、すなわち新しい社会や集団に適応する能力が不足する。そのほか多様な考え方に触れる機会が少なくなったり、自分の新たな面が発見しにくくなったりするなどの課題も考えられる。

そこで、以上のような小規模校の現状と課題を把握し、小規模校における課題である新しい人間関係を築く力を育成するための方策を提示することを目指し、調査研究を実施した。

2 調査研究の目的

全国の小規模の中学校への実態調査を行い、小規模校のよさや課題を踏まえ、人間関係に広がりをもたせるための交流活動の必要性について分析する。それらの分析結果を基にして、新しい人間関係を築く力を育成するために異世代交流学习の具体的な方策を提示する。

Ⅱ 調査研究の内容

1 調査研究の基本的な考え方

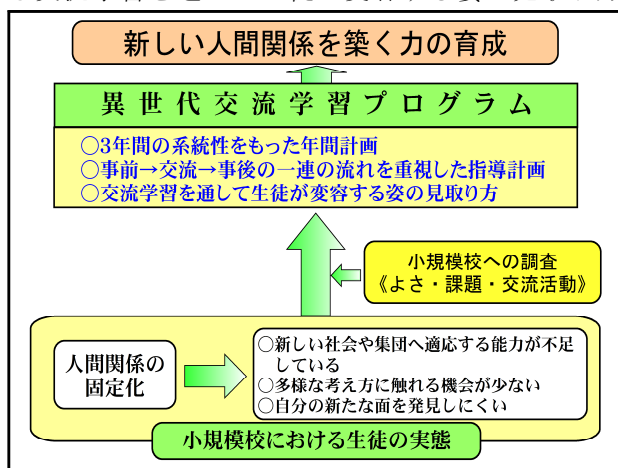
小規模校において、新しい人間関係を築く力を育成するためには、人と人が直接触れ合う体験を多くすることが必要と考える。

そこで本研究では、小規模校のよさや課題を踏まえ、交流活動及び教職員が異世代交流学习を通して生徒にどのような資質や能力の向上、若しくは変容を期待しているかについて把握することが重要であると考え、全国規模の実態調査を行う。その調査結果の分析・考察を基にして、以下のような異世代交流学习プログラムを提言したいと考える。

○3年間の系統性をもった年間計画

○事前→交流→事後の一連の流れを重視した指導計画

○交流学习を通して生徒が変容する姿の見取り方



研究構想図

2 調査の対象

○全国の公立中学校 119校（群馬県は15校）

地 方	小規模校数	抽出校数
北海道・東北〔1道4県〕	249	29
関 東 〔3県〕	35	20
北 陸 〔1県〕	28	10
中 部 〔2県〕	28	8
近 畿 〔1府4県〕	79	11
中国・四国 〔4県〕	78	20
九 州 〔4県〕	98	21
計 〔1道1府22県〕	595	119

※本研究では、小規模校の中から協力校の生徒数と同程度とし、学級単位で活動できる学校（全校生徒数60人以上120人以下）を対象とした。

○回答者：教務主任、学年主任、学級担任他

3 調査の内容

(1) 小規模校のよさと課題について

小規模校におけるよさと課題について調査する。項目については、文部科学省が作成した「学校規模によるメリット・デメリット」を参考にした。また項目を「学習面」「生活面」「学校運営面・経済面・連携面」に分け、それぞれについて調査を行う。

(2) 交流活動について

人間関係に広がりをもたせるための交流活動の必要性や実施状況について調査を行う。また様々な交流活動を通して、生徒にどのような資質や能力の向上、若しくは変容が期待できるかについても調査を行う。

4 調査方法及び実施日

○方 法：電子メールで質問票を配付及び回収

○実施日：8月上旬に配付し、8月下旬に回収

Ⅲ 調査の実施

調査の回収率は、80.0%（119校中95校）であり、調査の回答者数は、1校で複数の教職員の回答もあり、121名であった。

1 調査結果の分析

(1) 小規模校のよさと課題について

① 小規模校のよさ

「異学年間との縦の交流が生まれやすい」「保護者や地域社会との連携が図りやすい」と思っている教職員が多いことが分かった。また学級数が少ないために「施設や設備の利用時間などの調整が行いやすい」ことも明らかであり、交流活動や保護者・地域社会との活動が行いやすい環境が整っていることを示している。（図1）

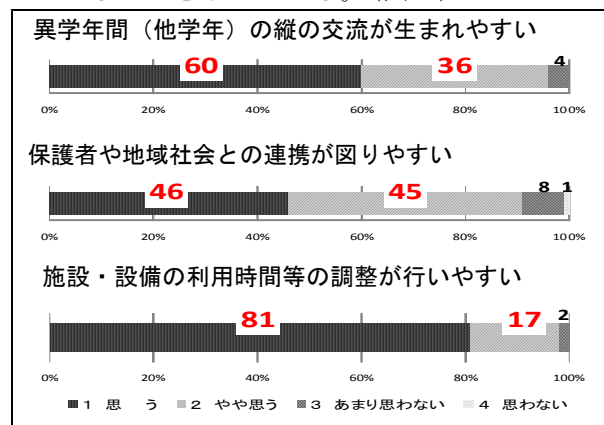


図1 小規模校におけるよさについての割合

② 小規模校の課題

かわり(交流)の幅が狭くなるため、多様な考え方に触れたり、生徒同士が切磋琢磨する機会が少ないこと、自分の新たな面を発見しにくいことが分かった。(図2)

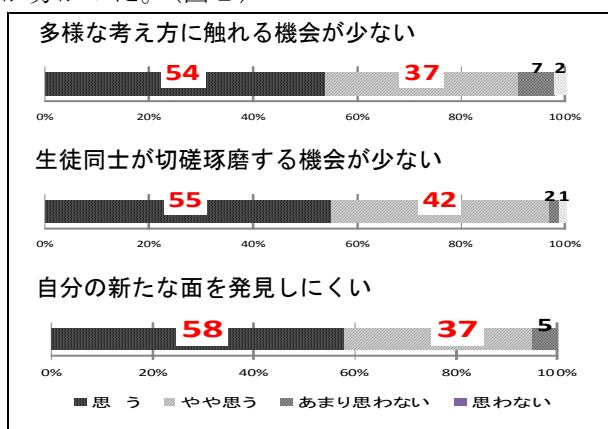


図2 小規模校における課題についての割合

(2) 交流活動について

① 小規模校の課題解決に向けての交流活動

小規模校の課題(図2)の設問で、「思う」「やや思う」と回答した教職員が、小規模校の課題を解決するためには、すべての交流活動が重要であると感じていることが分かった。(図3)

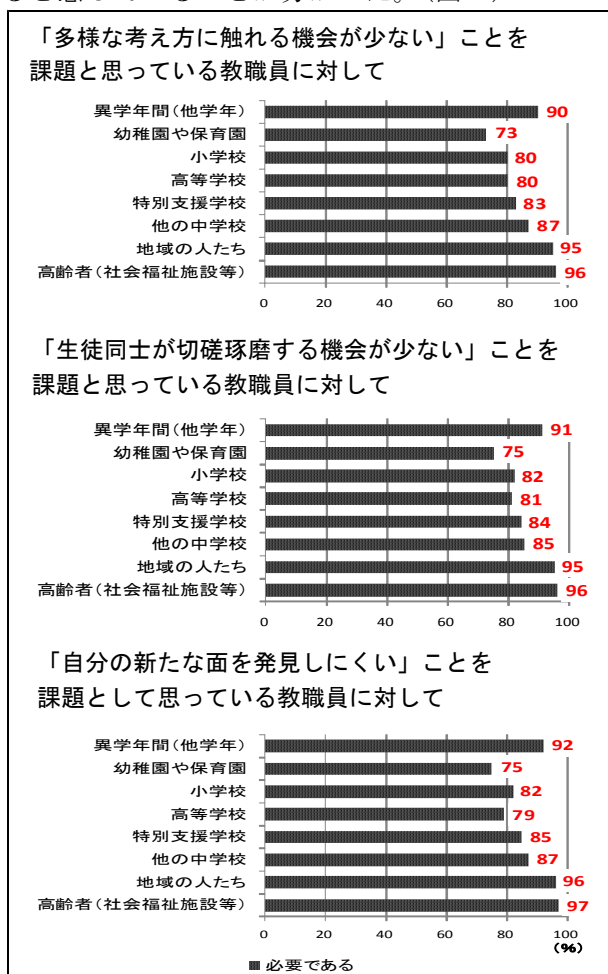


図3 課題解決に向けての交流活動の必要性についての割合

② 新たな社会や集団へ適応する能力を育成するための交流活動

中学校卒業後の新たな社会や集団へ適応する能力を育成するための交流活動の必要性については、「思う」が58%、「やや思う」が35%、「あまり思わない」が7%であった。(図4)

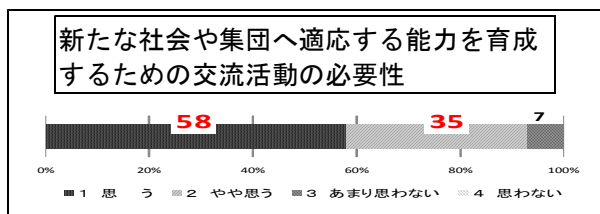


図4 交流活動の必要性についての割合

「思う」「やや思う」と回答した教職員93%は、すべての交流活動が必要と感じていることが分かった。回答にはその他の交流活動の欄を設けたが、回答を得ることができなかったことから、下記に挙げるものが中学校で実施している交流活動であると考えられる。(図5)

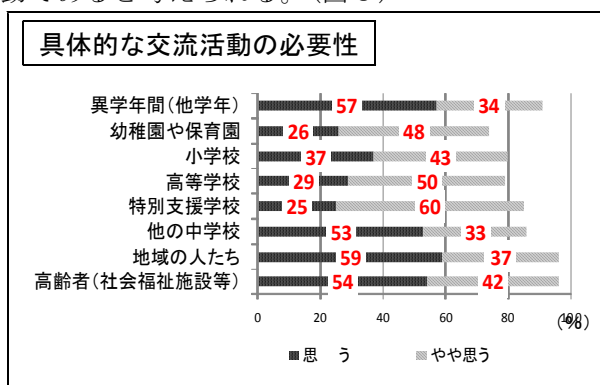


図5 具体的な交流活動の必要性についての割合

実際にかかわり(交流)をもった、またはもつ予定の活動については、異学年間、地域の人たちとの交流は90%以上、幼稚園や保育園、小学校、高齢者との交流は約80%、高等学校、他の中学校との交流は約40%、特別支援学校との交流については17%で、活動によって差があることが分かった。(図6)

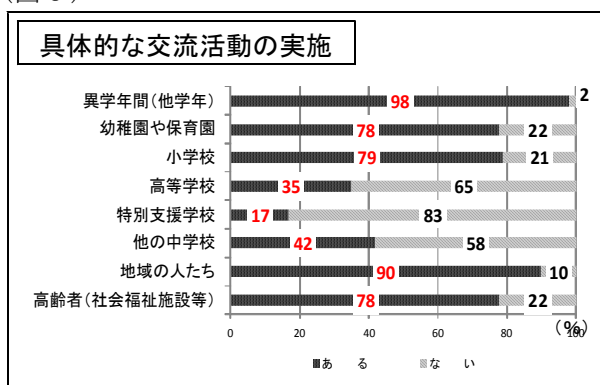


図6 具体的な交流活動の実施についての割合

図5、6から教職員は、すべての交流活動が必要であると考えているが、実際には高等学校、他の中学校、特別支援学校との交流学习を実施していないという実態が明らかとなった。

次に「新たな社会や集団に適応するための交流活動の必要性」(図4)について、「思う」と回答した集団58%〔以下、(ア)とする〕、「やや思う」と回答した集団35%〔以下、(イ)とする〕、「あまり思わない」と回答した集団7%〔以下、(ウ)とする〕として、細かく分析を行った。

(ア)と(イ)の教職員の意識の違いを具体的な交流活動の必要性(図5)と実施(図6)との関連から分析を行った。

交流活動を実施している(図6)と回答した教職員がその交流活動に必要性を感じている(図5)と回答した割合については、すべての交流活動において、(ア)の教職員が(イ)の教職員よりも圧倒的に多いことが分かった。このことから(ア)と(イ)の教職員では、交流活動を実施して、その交流活動が必要と感じているか否かには、大きな意識の違いがあることが明らかとなった。(図7)

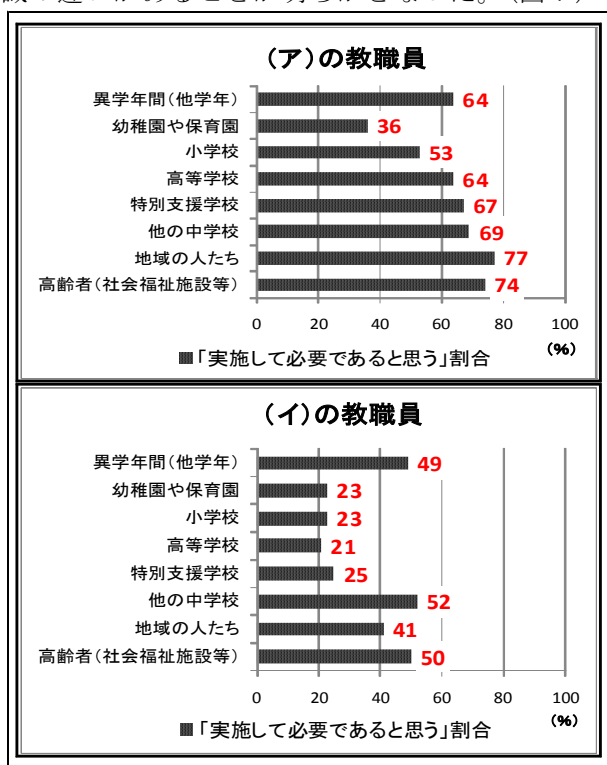


図7 (ア)と(イ)の交流活動を実施して必要と感じている割合

(ウ)の教職員の理由としては、「生徒の実態から交流活動を行わなくても十分である」「中学校卒業後に人間関係の広がりをもたせることで十分に間に合う」などが多かった。その他にも「交流する校種、施設との距離が遠い」という理由もあり、環境が課題の一つであることも分かった。

また、(ウ)の教職員が「新たな社会に適応する能力の育成」という視点を特に意識せずに、交流活動を実施している(実施しようとしている)ことも分かった。

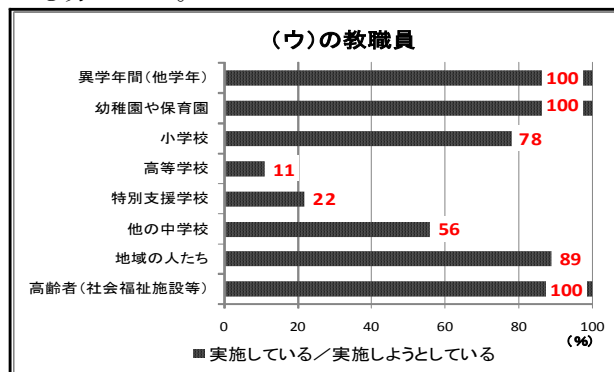


図8 (ウ)の具体的な交流活動の実施についての割合

③ 交流活動を通して、生徒に期待する変容の姿

様々な交流活動を通して、生徒にどのような資質や能力の向上、若しくは変容が期待できるかについては、様々な回答が得られた。その中で多かった回答を示した。(表1)

表1 様々なかわり(交流)を通して生徒にどのような資質や能力の向上、若しくは変容が期待できるかについての回答

交流の校種	期待する資質・能力や変容の姿
異 学 年	○リーダー性を育成することができる ○上下関係の正しいつき合い方を身に付けることができる ○連帯感をもつことができる
幼 稚 園	○思いやりや優しい心を育成することができる ○役に立っている、必要とされている(自己有用感)と感じることができる
小 学 校	○リーダー性を育成することができる ○自覚と責任感を培うことができる ○役に立っている、必要とされている(自己有用感)と感じることができる ○思いやりや優しい心を育成することができる ○中1ギャップの緩和ができる
高等学校	○進路を考える機会ができる ○将来を見通すことができる
特別支援学校	○思いやりや優しい心を育成することができる ○障害のある児童生徒を理解することができる ○自主性や行動力を育成することができる ○他者理解とともに助け合い、共生する意識や態度を養うことができる
他の中学校	○多様な考え方ができる ○切磋琢磨(向上心)の精神を育成することができる ○自分自身を振り返ることができる
地域の人	○地域の一員としての自覚を育てることができる ○地域に対する愛情(郷土愛)を育てることができる ○望ましい勤労観や職業観を育むことができる
高 齢 者	○いたわりや思いやりの心を育むことができる ○高齢者への理解や接し方を学ぶことができる ○福祉やボランティアの精神を育むことができる

様々な交流活動を通して、生徒の資質や能力の向上、若しくは変容が期待される中で「自己の振り返り」「自己有用感」「多様な考え方・価値観」「それぞれの校種への理解」「コミュニケーション能力」「思いやりの心」などは多くの交流活動で共通した項目であった。(表2)

表2 交流活動を通して、生徒に期待する変容の共通項目

	リーダー性	コミュニケーション能力	自己有用感	自己の振り返り	多様な考え方	思いやりの心	校種への理解
異学年	○	○	○	○	○	○	○
幼稚園	○		○	○		○	○
小学校	○	○	○	○	○	○	
高等学校				○	○		○
特別支援学校		○	○	○	○	○	○
他の中学校		○	○	○	○		○
地域の人たち		○	○	○	○		○
高齢者		○	○	○	○	○	○

2 調査結果の考察

(1) 小規模校のよさと課題について

① 小規模校のよさ

小規模校では、「異学年間（他学年）との交流活動がしやすい」「教職員間、保護者や地域社会との連携を密に図りやすい」「施設や設備が利用しやすい」などのよさがある。これらのよさを効果的に活用することによって、多様な考え方に触れたり、生徒同士が切磋琢磨したりする機会が少ない場合でも、生徒に様々な学習場面や学習形態を提供できると考える。

② 小規模校の課題

生徒数や学級数が少なく、集団活動に制約があるために、様々な人と触れ合う機会が限られてしまうという課題がある。そのため新たな自分のよさを発見しづらく、さらにはクラス替えも困難なことから、学級内においては人間関係に深まりや安定性が見られない生徒も出てくる。これらの課題を解決するために、教職員は生徒の実態や発達段階に応じた学習方法や学習形態を工夫して取り組むことが大切であると考えます。

(2) 交流活動について

① 小規模校の課題解決に向けての交流活動

小規模校にとっては、生徒数が少ないために、人間関係が固定化されてしまう現状がある。そこから、「多様な考え方に触れる機会が少ない」「自分の新たな面を発見しにくい」など、様々な課題

が生じてくる。そして教職員は、その課題を解決するために、異学年間（他学年）との交流を重要視している。しかし同じ学校内にいて、行事や部活動などで顔見知りの異学年間（他学年）との交流だけでは、課題を解決するには不十分である。そこで学校外に視野を向け、人と人が直接触れ合うような体験である交流活動を行っていくことが必要となる。様々な交流活動は、生徒にとって自信をもたせたり、自分は役に立っていると感じさせたりする効果的な学習であると考えます。

② 新たな社会や集団へ適応する能力を育成するための交流活動

新たな社会に適応する能力を育成するためには、交流活動が必要であると感じている教職員は多い。それは様々な校種の幼児児童生徒や施設の人たちとの異世代交流学習を通して、生徒たちがふだんの学校生活では味わうことのできない体験を行うことによって、自己有用感やコミュニケーション能力が高まったり、自己を振り返る力を培ったりできると考えるからである。しかし、実際には交流活動を実施することに対して、肯定的に思っている教職員の中でも意識の大きな差があり、実施しているがその活動に大きな期待や必要性を感じていない教職員もいる。そこで生徒の発達段階に応じ、3年間の系統性をもたせた交流活動の計画、さらに自己を振り返り、今後の生活に生かすような当日の交流活動、事前・事後学習が重要となると考える。

③ 交流活動を通して、生徒に期待する変容の姿

様々な交流活動を通して、教職員が生徒にどのような資質や能力の向上、若しくは変容を期待しているかについては、様々な回答を得ることができた。これは地域や学校、生徒の実態が多様であり、その実態に即した活動が展開されているからである。一方、生徒へ期待している項目の共通性も見られる。これは交流活動を実施する時期や形態は異なるが、生徒に交流活動を通して学んで欲しいことの多くは共通しているからである。その中でも「自分を振り返る、見つめ直す」という項目が、すべての交流活動に挙げられていることは、ふだんの学校生活だけでは自己を振り返る場面が不足しており、交流活動を通して、新たな自分のよさを発見して欲しいと願っているからである。教職員が交流活動を通して、生徒の変容した姿を把握することができれば、様々な生活場面で適切な支援ができると考える。

IV 調査結果を生かした教育実践

1 実践の基本的な考え方

(1) 小規模校の実態に関する調査の考察

これまでの小規模校の実態に関する調査の分析・考察から、課題を解決するため、新たな社会に適應する能力を育成するためには、交流活動が有効な学習であることが分かる。そこで交流活動を実施する上で、次の3点が重要であると考える。

- 生徒の発達段階に即し、その交流活動が次の学習・交流活動に生かされるように系統性をもたせた計画を作成すること。
- 自己の振り返り、今後の生活に生かされるような事前学習、当日の交流活動、事後学習を行うこと。
- 教職員が生徒に対して、様々な生活場面で適切な支援をするためには、交流活動を通して、生徒の変容した姿を把握すること。

2 調査結果の活用

調査結果を踏まえ、新しい人間関係を築く力を育成するための「異世代交流学習プログラム」を次のように提言する。

異世代交流学習プログラム

3年間の系統性をもった年間計画

事前→交流→事後の一連の流れを重視した指導計画

交流学習を通して生徒が変容する姿の見取り方

(1) 3年間の系統性をもった年間計画

事前学習では、交流する相手を理解し、交流当日に充実感や満足感がもてるように計画を立てること、事後学習では自分自身を振り返らせ、今後の生活に生かせるような内容を取り入れることが大切である。また交流学習後には、発表会を実施して異学年交流を図ることも大切である。発表する生徒にとっては、個々に活躍する場面が増えること、発表を聴く生徒にとっては、今後自分たちが実施する交流学習を把握することができる。また生徒の実態に応じて系統的に交流学習を実施することで、段階的に生徒が資質や能力の向上を図ることができ、教師にとっては見通しとねらいをもって取り組むことができる。(図9)

① 1年生

上級生からの定期テストのアドバイスや交流学習後の発表会での交流が、中学校生活を理解することにつながる。その上級生との交流を生かして、小学校6年生に中学校生活への不安の軽減を図るための新入生説明会を実施することで、中学校生活では常に下級生の立場である1年生が、人の役に立つ体験をすることにより、自己有用感を獲得し、よき上級生になる自覚をもつことができる。

② 2年生

1年生に定期テストのアドバイス、職場体験学習で地域交流を体験した後に幼稚園との交流学習を実施する。職場体験学習での年上の人たちとの交流では、自分の考えや思っていることをうまく伝えられなかった生徒も、自分よりも年下である幼稚園児との交流では、誰もが頼りにされるために積極的にかわり合うことができる。

③ 3年生

2年間の交流学習を踏まえ高齢者との交流学習を実施する。高齢者との交流では、互いの違いを理解し、受け入れ、自ら積極的に働きかけなければコミュニケーションは成立しない。これは中学校卒業後の新たな社会や集団に適應するときにも重要なことである。また異学年間の交流学習では、常に下級生の見本となるとともに、役に立つことができた、自分もやればできるという実感ももたせることができる。

年間計画の中では位置付いていない交流についても「高等学校との交流」は、中学3年生による高校体験入学や高校説明会、「他の中学校との交流」は、部活動でのかわり、「地域の人との交流」は、職場体験学習で地域の実態に即したかわりがもてると考える。また「特別支援学校との交流」は、全校体制での交流学習指導計画を次頁からの(2)事前→交流→事後の一連の流れを重視した指導計画で示す。(図13)

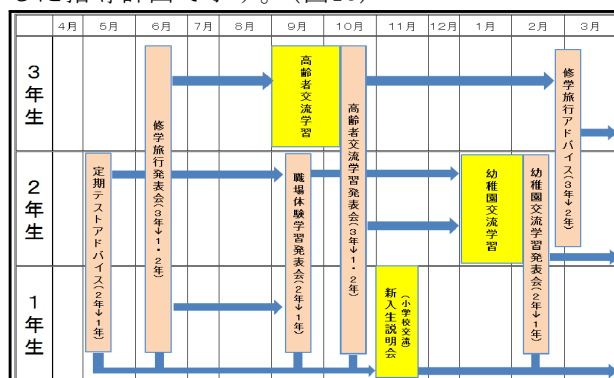


図9 3年間の系統性をもった年間計画

① 高齢者との交流学習指導計画

らいとしている。また要望書や自己紹介カードを利用することにより、どのような交流学习を実施したいのかが明確になると考える。事後学習では、異学年交流として発表会を実施することにより、交流学习を自分自身で振り返ることができ、さらには後輩のために役に立ったという実感をもたせることができる。(図10)

図10 高齢者との交流学習指導計画及び要望書／自己紹介カード(例)

② 幼稚園との交流学習指導計画

とをねらいとしている。事後学習では、高齢者との交流学习と同様に発表会に向けての時間を多く設定した。上級生の発表会での様子を参考にして、個々が活躍できる場面を多く設定することができる。(図11)

図11 幼稚園との交流学習指導計画及び学習シート

1年生にとっては、異学年以外との交流学習は初となるために、事前学習中の発表準備に多時間を配当した。発表に向けての取組はこれま

での上級生の発表会での様子を参考にすることができる。また事後学習では、小学生や教員の感想やアンケートを基に振り返らせることを通して、達成感や充実感をもたせることができる。(図12)

図12 小学生との交流学習指導計画及び学習シート

特別支援学校との交流学习は、交流活動のため事前打合せの手順や方法が分からないことなどから、実施してる割合が極めて低い。そこで3年間の系統性をもった年間計画(図9)には位置付けていないが、全校での交流活動の指導計画例を作成した。事前学習では特別支援学校と障がいにつ

いての理解を深め、交流では特別支援学校の学校祭を通して、一緒に製作準備や当日の学校祭の活動を行う計画を考えた。特別支援学校の生徒の実態を踏まえるために、学校間の打合せを多く設定したり、準備時間を十分に確保したりするなど、長期的な計画が必要となるため、配当時間は省略した。(図13)

図13 特別支援学校との交流学習指導計画及び学習指導案

(3) 交流学习を通して生徒が変容する姿の見取り方

異世代交流学习を通して、生徒の変容する姿を「C&S質問紙による実態の把握」から見取り、さらにその結果を基にして、「個々の感想及び事前・事後アンケートの結果」から詳細に見取るという2段階での見取り方を考えた。このことにより学級及び生徒にとって、効果的な交流学习であったか、今後の学習にどのように役立てていけばよいかなどが明確になると考える。また今回の研究では協力校での高齢者との交流学习を基に見取り方を例示した。

① C&S質問紙について

C&S質問紙は本センターにおいて、平成19年度に田所、村上長期研修員が「いじめや不登校を予防する学級経営改善に関する研究」で開発した質問紙である。この質問紙から自己肯定感と学級の雰囲気の二つの観点から客観的・視覚的に実態を把握し、質問紙の結果を散布図に表すことができる。本研究では、学級及び個の実態を異世代交流学习の事前と事後に質問紙を実施して、学級及び個の自己肯定感の変容を見取ることとした。

② 自己肯定感の概念

本研究では、自己肯定感を自分自身に対する認識として、自己の身体的な特徴や能力・性格などについて肯定的に考えたり、感じたりする感情とする。自分を好きな子どもは、自分の能力や特性を肯定的にとらえ、自分のもっている力を十分に発揮できる傾向がある。さらに「自分にもできた」「自分は必要とされている」といった体験を通して、生徒は自己肯定感を高めることができる。

以上のことから、交流学习を通して他者から受け入れられたり、認められたりすることにより、自己の存在感や効力感、有用感といった感覚が高まる。自分のよさを知ったり、ありのままの自分を受け入れたりしながら、自分のことが好きになり、生徒は自己肯定感が高まると考えた。(図14)

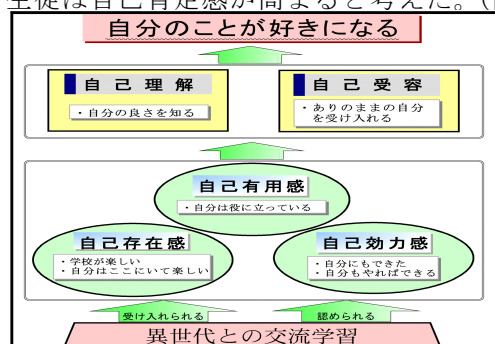


図14 交流学习によって自己肯定感が高まるプロセス

③ 交流学习前後の学級全体の変容

高齢者との交流を通して、生徒がどのように変容したかを「C&S質問紙」を利用してプロット(点)で分布したものである。また、ここでは生徒一人一人の変容を見取るのではなく、学級全体の変容の見取りを表している。

交流学习前から自己肯定感が高かった生徒数名の数値が低くなったが、交流学习前に自己肯定感が低かった生徒のほとんどが高くなっている。具体的には26人中18人の生徒が交流学习前よりも交流学习後の方が自己肯定感が高まっている。このことから学級全体としては交流学习前よりも交流学习後の方が多少ではあるが、自己肯定感が高まっていると考える。(図15)

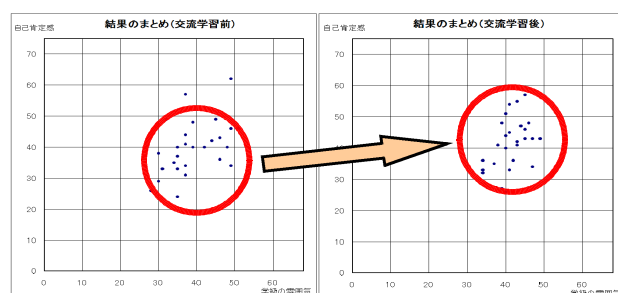


図15 交流学习前後の学級全体の変容

C&S質問紙での自己肯定感以外の変容の見取り方として交流学习を終えてのアンケートを実施した。このアンケートには、実施した調査で、交流学习から生徒に学んで欲しいことやどのように変容して欲しいのかという設問に対する回答として得られた内容が項目の中に含まれている。このことから、このアンケート結果によって、生徒にとって交流学习がどのような学習であったかを見取ることには有効である。(図16)

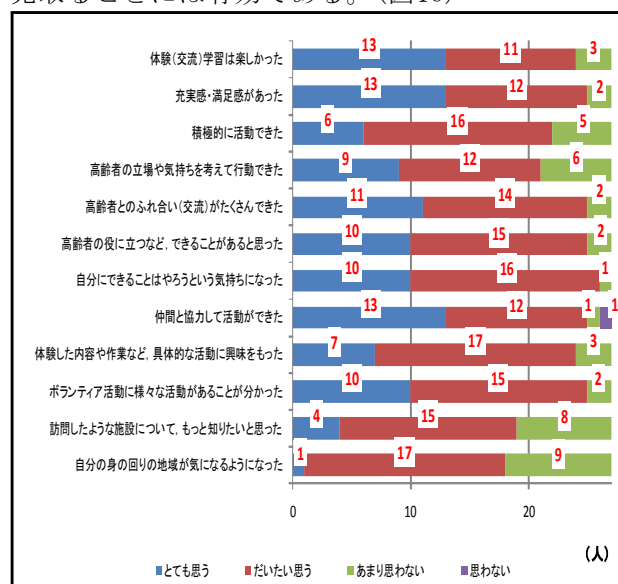


図16 交流学习を終えてのアンケート結果

④ 交流学习を通しての個の変容

前頁の交流学习を通じた学級全体の変容(図15)の中から、交流学习前後で自己肯定感が高くなった生徒と低くなった生徒をそれぞれ抽出したものである。ここで重要なことは、質問紙での変容結果、事前・事後のアンケート結果や感想、さらには日常生活の観察を併せて分析することである。(図17)

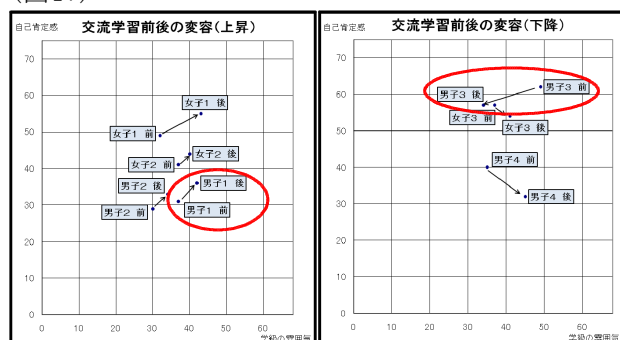


図17 交流学习を通しての個の変容

次に図17で抽出された生徒の個々の事前・事後アンケート結果と感想を示した。ここでは特に自己肯定感が低くなった生徒について、アンケート結果及び感想などから分析・考察した。

○交流学习を通して自己肯定感が高まった生徒

抽出生徒-男子1

○事前アンケートから

- ・「交流学习を楽しみにしていますか」・・・あまり思わない
- ・「様々な人との交流(ふれ合い)を期待していますか」・・・あまり思わない

○事後アンケートから

- ・「交流学习は楽しかったですか」・・・とても思う
- ・「充実感・達成感がありましたか」・・・とても思う
- ・「積極的に活動ができましたか」・・・思う
- ・「自分の身の回りの地域が気になるようになりましたか」・・・思う

○感想から

僕は最初、最悪な気分だった。それはなぜかというと、僕は知らない人とふれ合うことがものすごく苦手だからだ。社会福祉施設に着いて、最初はものすごく緊張して、うまくしゃべれなかった。体験もごちなかったけれど、最後の方は少しは緊張もほぐれて、最初よりもうまく手を動かせるようになったのでよかった。施設内が広くて、清掃が大変だったけれど、楽しく作業ができた。色々大変だったけれど、いい体験になった。

○交流学习を通して自己肯定感が低くなった生徒

抽出生徒-男子3

○事前アンケートから

- ・「交流学习を楽しみにしていますか」・・・思う
- ・「様々な人との交流(ふれ合い)を期待していますか」・・・思う
- ・「あいさつや言葉づかいの大切さを期待していますか」・・・思う
- ・「仲間と協力して活動することを期待していますか」・・・とても思う

○事後アンケートから

- ・「交流学习は楽しかったですか」・・・とても思う
- ・「充実感・達成感がありましたか」・・・思う
- ・「高齢者とのふれ合いがたくさんできましたか」・・・とても思う
- ・「高齢者の立場や気持ちを考えて行動ができましたか」・・・とても思う
- ・「自分にも高齢者の役に立つなど、できることがあると思いませんか」・・・思う
- ・「仲間と協力して活動することができましたか」・・・まったく思わない

○感想から

僕は認知症の人のお話をしました。施設を利用する人たちの気持ちを考えて行動することがとても難しかったです。しかし利用者の人たちに「ありがとう」と言われたときは、普段では味わえない喜びを感じることができました。

事前・事後のアンケート結果の中で、仲間と協力して活動することを期待していたが、実際には協力して活動することが全くできなかったことが分かる。このことが自己肯定感を低くした大きな要因であると考ええる。しかしその他のアンケート結果や感想では、全体的には交流学习に対して肯定的である。今後の学校生活や交流学习において、意識的に仲間と協力する場面を設定し、協調性を意識させる手だてを講じることが重要となる。

IV 調査研究のまとめ

1 研究のまとめ

本研究は、すべての学校で実施している交流学习についての研究であり、小規模校の生徒が異世代交流学习を通して、新しい人間関係を築く力を育成することを目的としたものである。調査結果からも多くの学校で、多くの教職員が小規模校のよさを生かしながら、課題を解決するために様々な工夫を凝らして交流学习を実施していることが明らかとなった。このことは、交流学习には生徒同士や家族とのかかわり合いの中では経験することの少ない「頼りにされる」「役に立つ」機会が豊富にあるからである。また交流学习を実施したものの、その必要性が感じられない教職員もいるなど、交流学习の教職員の充実感には差があることも分かった。しかし小規模校で抱えている課題を解決するためには、交流学习は必要不可欠な学習である。そこで異世代交流学习の充実を図るためのプログラムを作成し提示した。このプログラムを参考にし、今までの交流学习を見直して実践すれば、生徒にとって、新しい人間関係を築く力が育成されるものと考ええる。

2 今後の課題

今後の課題としては、今回の研究で提示することができなかった交流(他の中学校・高等学校・地域の人たち)についての学習プログラムを作成し、提案をしていきたいと考える。そして改良された学習プログラムを基にして実践を行い、さらに充実した異世代交流学习が展開できるように努めていきたいと考える。

〈参考文献〉

- ・全国へき地教育研究連盟 編著 『へき地・複式・小規模学校の実践事例集』(2008)